

読賣新聞

2007年(平成19年) 10月14日 日曜日

大地震を起こす原因でもある地殻を覆う巨大な板状の岩盤「プレート」が、地中に沈み込んだ先でどうなっているかを探る日米中の共同調査が、来年度から中国の黒竜江省など東北部で始まる。150万平方キロに計280個の地震計を配置する世界最大級の観測網で、地球内部活動の全体像を初めて明らかにする試みだ。

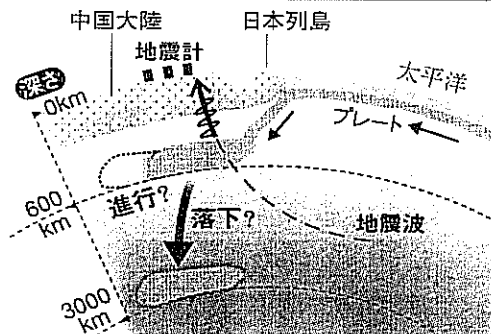
東京大学や海洋研究開発機構、米国のテキサス大学やライス大学、中国地震局

プレートの行く先 地震波で観測

などが実施し、南北1000キロ、東西1500キロの範囲に70〜80キロ間隔で地震計を埋設する。2008〜11年に観測を、12年までにデータ解析を行い、日本は約2億円を負担する。

日本列島の下には、西進してきた太平洋の海底が沈み込んでいる。この海底が今回の観測で注目しているプレートで、中国の地下600キロに行き着いている」とはわかっているが、その先は不明だ。そのあたりで

地震波観測でとらえる地球内部の様子



中国東北部に計測網

日米中、共同調査
来年度から開始
しばらくたまた後、プレートの先端がより深い場所に落ちていく説が有力だが、それを観測で確かめる。また、南太平洋の地下3000キロの深部に広がっている高温岩石の性質も調べ

や方向を変える。こうした性質を利用し、プレート先端部の形状や、熱さ硬さなどを、遠くから来た地震波から解析する。

プレート先端が深部に落ちると、その分の高温岩石が別の場所から上がり、新たなプレートの動きや火山が生まれる可能性がある。観測に参加する東大の川勝均教授(地震学)は、「地球内部の活動が活発になる周期が見えてくるかもしれない」と期待している。